

障害者殺傷事件から1年

②

意味なき
命はない

「津久井やまゆり園は、利用者家族にとっては苦勞の末、やっとたどり着いた場所です。利用する子どもたちにとっては、かけがえのない暮らしの場、家」だと思っています」

家族会の大月和真会長(67)はこう話します。家族会が会員にアンケートをとったところ、9割が元の場所での再建を望んでいることが分かりました。

余暇活動に力を

26日で殺傷事件から1年と



大月和真会長

なるやまゆり園。事件前は、余暇活動に力を入れていたといえます。近隣の県立高校茶華道部による手ほどき、野球や相撲などの観戦、陶芸…。昨年6月に開催した交流行事も、利用者・家族・職員らのはじめけるように歌って踊り、大成功だったと、大月さんは話します。「入所施設は

暮らしと交流の「家」

閉鎖的」といわれることがありますが、園の実態からはかけ離れています」

大月さんの息子寛也さん(36)は、18歳で入所。自閉



いまは誰も暮らしておらず、ひっそりとした津久井やまゆり園の居住棟。20日、相模原市

症があり、身の回りのことはほとんどできず洋服を着るにも介助が必要でした。「今は自分でコーディネートするようになった」と大月さんは目を細めます。寛也さんは血糖値が高いため、カロリーコントロールが必要で、「自宅だと抑制できないけれど、やまゆり園で食事の配慮があるから生きていける」

事件乗り越えて

神奈川県は今年1月、やまゆり園の再生に向け「基本理念」を出しました。「現在地での全面的な建て替えによって、事件を風化させることなく、事件の凄惨なイメージを払しょくし、再生のシンボルとして、利用者の人権に配慮しながら、安全・安心で暮らす」としています。

大月さんはこの基本理念を評価。しかし、一部の関係者から「大規模施設はいらな

い」などの声が出され、県は方針を転換しようとしています。やまゆり園再生を議論する専門部会は、グループホームなどでの生活に移行することを検討しています。

これに対し大月さんは「入所施設が事件の根底にあるかどうかのような声もありますが、それは違うのではないのでしょうか。やまゆり園に入りたくても入れない待機者もいます。多くの人たちが希望を失わないようにしてほしい」と訴えます。

事件後、やまゆり園のことがひと時も頭から離れたことがないと話す大月さん。「被告男性がなぜ『障害者

は不幸を作ることしかできない』などと考えるようになったのか。再発防止にはどんな仕組みが必要なのか。事件を乗り越えて、盛り返していきけるよう力を合わせていきたい」と強調します。

かけがえのない場に

大月さんはこの基本理念を評価。しかし、一部の関係者から「大規模施設はいらな